様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：９９９９９
研究種目：奨励研究
研究期間：2022～2022
課題番号：２２Ｈ０４１３３

研究課題名　　通級指導教室の体験学習を通した「障害理解教育」の実践的研究

研究代表者
安里　健志（Yasuzato, Takeshi）

大和高田市立浮孔西小学校・公立小学校教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　440,000円

研究成果の概要：本研究では、学校教育現場における障害理解教育の課題を整理したうえで、通級指導に関する体験学習を取り入れた障害理解教育を通級指導担当教員が実施し、小学校の通常の学級児童に及ぼす教育的効果について検証した。障害理解教育の課題の整理では、障害理解教育が教育課程に明確に位置付けられていない、単なる体験学習になってしまっているなどの課題が文献調査によって明らかにされた。また、体験学習を取り入れた障害理解教育では、通常の学級の児童が難しいと感じる活動を取り入れたことで、周囲児童の障害に対する考え方に変化が見られたことから、本実践が周囲児童の障害理解の推進に寄与できる可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本で初めての障害理解に関する専門書である「障害理解－心のバリアフリーの理論と実践－」（徳田・水野, 2005)刊行以後の、小中学校における障害理解教育に関する文献調査を行い、レビュー資料を完成させた。また、通級指導の体験学習を含む障害理解教育では、周囲児童の障害に対する考え方に変化が見られたことから、今後の障害理解教育を推進していく上で、通級指導がその役割の一部を担うことができる可能性を示すことができた。さらに、1時間の授業だけでは児童の障害理解の深めきれないこと、疑似体験では「工夫すればできる」という視点にたって授業設計をする必要があることなどの課題を明らかにすることができた。

研究分野：障害理解教育

キーワード：障害理解教育　通級による指導　障害理解　通級指導の体験学習　認知機能トレーニング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

本研究は、通級指導担当教員が通常の学級において、通級指導での学習体験を取り入れた障害理解教育を実施することで、通級指導に対する理解や障害理解に関する通常の学級児童の意識にどのような変容をもたらすのかについて、その効果を明らかにすることを目的とする。

研究①では、日本で初めての障害理解に関する専門書である「障害理解－心のバリアフリーの理論と実践－」 (徳田・水野、2005)を基に、現在の小中学校における障害理解教育に関する文献調査を行う。

研究②では、奈良県内の公立小学校において（通級による児童が在籍する 5 年生の児童 51 名を対象)、通級指導教室の体験学習を含む障害理解教育を実施し、テキストマイニングツールを活用して児童の記述分析を行うことで、その効果を分析する。

２．研究成果

(1) 研究１：文献調査

研究１では､文献調査を実施した｡はじめに障害理解教育に関する学校現場の課題について、日本で初めての障害理解に関する専門書である｢障害理解－心のバリアフリーの理論と実践－」(徳田・水野、2005)を参考にして、障害理解教育に関する課題についてまとめる視点を抽出した。抽出された視点は、「障害理解教育の必要性」・「障害理解の発達段階」・「体験学習・疑似体験」・「障害に関する偏りや誇張」・「思いやり教育」・「外からはわかりにくい障害」・「みんな同じ教育」・「道徳科における障害理解教育」・「総合的な学習の時間における障害理解教育」・「交流及び共同学習における障害理解教育」などであった。

その後、Cinii Research(国立情報学研究所)を用いて次のキーワードで電子検索を行い、障害理解教育(131 件)、障がい理解教育(14 件)、障害理解授業(14 件)、障害理解学習(13 件) 、障害理解研究(74 件)の中から、小中学校現場における障害理解教育に関わる 80 件を分析対象とした。論文の選定は、筆者（小学校教員教員歴 12 年）が１人で行った。

文献調査を行った結果、これまでの障害理解教育の成果や実践の蓄積が確認できた一方、残存する課題が少なくないことが明らかとなった。今後の障害理解教育における展望として、①障害理解に関する国レベルの共通理解を図り教育課程に位置づけること、②障害に関する科学的な認識を深める授業とともに障害理解を含む人間理解教育を教育活動全体で推進する二重構造で展開すること、③できる疑似体験に加え事前事後指導を取り入れること、④適切な行動や具体的な援助について考えさせること､⑤障害や障害者に対するポジティブな感情を育むこと、⑥思いやり教育ではなく対等な関係を育むこと、⑦児童生徒の実態を踏まえた個別具体的なプログラムを開発すること、⑧教員における障害理解に関する研修を充実させること、⑨障害に関する社会的な認知を推進すること、⑩実施する教員側の困難や課題を併せて検討すること、などが示された。

(2) 研究 2：実践研究

実践は、小学校の１コマ分(45 分)の授業構成で実施した。筆者が通級指導教室に関する説明を後、通級指導で実際に行われている学習の体験活動を行い、最後に障害理解に関する授業を行った。通級指導教室での学習に関する体験学習では、認知機能トレーニングやコミュニケーションのトレーニングに関する活動を取り入れた。その際、通常の学級の児童にとっても難しいと感じられるような活動を取り入れた。最後に、「読むこと」が苦手な架空の児童を紹介し、文字が歪んで見えたり二重に見えたりする疑似体験を行い、社会には様々な障害や障壁があることを児童に気づかせ、それらを取り除いたり乗り越えたりするには何が必要なのかを考えさせ、ふり返りを行った。

これら実践を通した児童の意識変容について、「障害という言葉を聞いて、どのようなことを思い浮かべますか。」という質問を実践前後に児童に実施した。その際に得られた回答をテキストマイニングで分析した。実践前後のテキストマイニングの結果は、図１と図２のように示された。

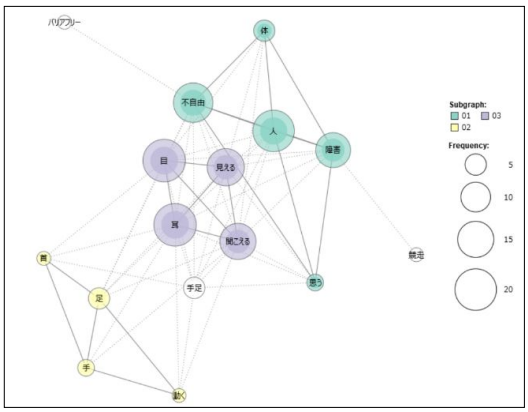

図１ 語と語の結びつき（実践前）

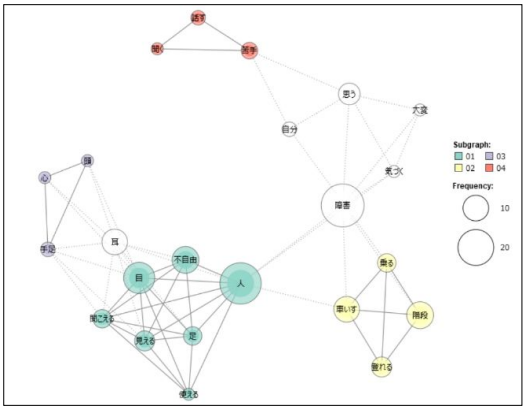

図２ 語と語の結びつき（実践後）

実践前の回答では、「耳」や「目」といった語や、「足」・「手足」、「体」といった語彙が複数回抽出された。これらは身体に関する記述から、障害という言葉を聞いて児童が思い浮かべるのが、身体的な障害が多いことが推測された。また、実際の記述に着目すると、「目が見えない人」、「耳が聞こえない人」、「足が不自由な人」といった記述が非常に多かった。これらの記述から、本実践の前に児童が障害と聞いて思い浮かべたものは、身体的な障害であり、それらは語と語の結びつきからも看取できた(図 1)。次に、実践終了後の回答では、実践前には存在しなかった語彙として、「心」と「頭」という語彙がそれぞれ 2 回抽出された。具体的に児童 A の記述に着目すると、実践前では「目・耳・手足・首」であったものが、実践後には「目・耳・手足・頭・心」と変容を見せていた。これらは、本実践が障害とは身体的な障害だけではなく、心や脳に関する障害が存在することに児童が気づくきっかけとなった可能性があると言える。加えてこのような障害観の広がりは、図 2 における「障害」という語との結びつきの変容からも、児童の障害観に何らかの変化をもたらした可能性を看取できた。

これらから、通級指導担当教員が体験学習に加えて障害理解教育を実施することで，障害に対する児童の考え方に変化が見られたことから，通級指導担当教員が障害理解教育を実施することで児童の障害理解の推進に寄与できる可能性が示唆された。

一方、本実践では体験学習と障害理解教育を１時間に凝縮して実施したが、十分な時間であったとは言えない。障害理解は単発での学習では効果が期待できない場合もあるとの先行研究もあることから、本実践の時間配分や計画については見直していくことが必要であると考える。また、アンケート項目②の中には、「障害のある人はかわいそうだと思った。」などの記述があった。これらの記述は障害に対する「気づきの段階」(徳田・水野、2005)とも考えられるが、障害に関する偏った理解に至っていた可能性も考えられる。また、「障害のある人は大変だから助けてあげたい。」といった児童の記述は、一見障害に関して理解を深めているようにも考えられるが、同情や憐憫で留まってしまっていた可能性がある。本実践では字の歪みや二重に見える疑似体験が中心であったため、障害がある児童は大変でありかわいそうであるというような誤った理解を与えてしまった可能性がある。障害理解教育を進める上で、「できる体験」が必要であることが指摘されているが、今後はそうした疑似体験にすることで、障害に対する正しい知識を児童に獲得させていくことが必要であると考える。これらは今後の課題であると言える。

（３）総合考察

本研究を通して、学校現場における障害理解教育にはさまざまな課題があることが示された。また、今後はそれら課題と実施者である教員の負担や困難さを合わせて考えることが肝要であることも示された。

さらに、現在学校現場においてニーズが急増している「通級による指導」が、障害理解教育の推進の一助となる可能性があることも示された。今後は研究１で示された課題を踏まえ、通級指導が果たす障害理解教育の在り方について検討されることが必要である。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 安里健志	４．巻 J24
２．論文標題 小・中学校における障害理解教育の課題に関する基礎的研究 －「障害理解－心のバリアフリーの理論と実践－」以降の研究から－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 障害理解研究	６．最初と最後の頁 5-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名